安曇氏族のその後　　金井　恂

安曇氏族は弥生時代から平安時代始めまでの約千年の長い歴史の中で、日本列島の広い範囲に分布して繁栄していた。神話では神武天皇の母と祖母は安曇氏族の祖神の娘であり、すると天皇家の外戚ということになる。古代においてはヤマト王権に近く、大きな勢力を持った氏族だった。持統天皇のころには古代から続く１８氏族の一つとされていた。

しかし、安曇氏族は今ではすっかり衰退してしまい、安曇姓を名乗る人もわずかになってしまった。そして全国のゆかりの地においても、安曇という郡郷名は大半が消えて無くなってしまった。なぜそのように衰退してしまったのか。その事情は、今となっては史料不足のため不明であるが、その大略の事情を推測してみる。

１　大和朝廷における安曇連の衰退

『新撰姓氏録(しんせんしょうじろく)』は平安時代はじめ（814 年）に作成されたものであるが、それによると京都と畿内には、安曇宿禰(あづみのすくね)(安曇連(あづみむらじ))、海犬養(あまのいぬかい)、凡海連(おおしあまのむらじ)、八木造(やぎのみやつこ)、安曇犬養連(あづみいぬかいのむらじ)が居住していた。これらが安曇氏族である。

古墳時代応神天皇三年（385 年)、大浜宿禰（安曇連の祖）は海人(あま)たちの騒動を鎮め、その功績により応神天皇から「海人(あま)の宰(みことも ち)」(海人の統率者）に任命され、安曇連という氏姓（ウヂ）を与えられた。その後仁徳天皇の時代にかけて播磨国・摂津国で大きく繁栄していた。

ところが大浜宿禰の子供の阿曇連浜子は、住吉仲皇子の皇太子暗殺クーデターに加担し、敗北してしまう。その結果、死罪は免除されたものの大きなダメージをこうむった。しかし安曇連は滅亡するのではなく、この地域で長い期間雌伏していた。

そして飛鳥時代、推古天皇の後期（623 年ころ）に復活し、朝廷に参内するようになった。その後、孝徳・天智・天武・持統天皇の時代に朝廷で文官として大いに活躍していた。この時代は安曇氏族の繁栄期であった。

しかし大化改新（645 年）の国家支配制度の変革を契機として、それ以降では衰退傾向がはじまった。改新の詔(みことのり)には皇族や豪族たちが私有する土地および私有する民を廃止せよという条項がある。公地公民制といわれるものである。これを実施するためには正確な戸籍簿や土地台帳等が必要であり、実施は大宝律令制定の 701 年のころまで延びたようである。

その代償として豪族たちには位階と官職が与えられ、それに応じて位田・位封、職田・職封、位禄、季禄という職給が与えられた。職給の内容は、五位以上の貴族たちに厚く、それ以下の官人たちには薄いものだった。豪族たちにとって、位階と官職を得ることにより地位

と名誉は確かになったものの、位階の低い者は経済的には大変に貧弱なものだった。

律令制度が整った段階では、安曇宿禰の位階は通常は6位以下であり、五位に昇進することは少なかった。それ故に経済的には苦しかったと思われる。以前のころの威勢は無くなり、氏族としてのまとまりも無くなってしまったと思われる。なかには国司に任命されて赴任し、それなりに財を蓄えた者もいたと思われるが、それも一時期のことであった。つまり安曇宿禰の威勢はすっかり衰えてしまったと考えられる。

そのような状況のなかで、安曇宿禰継成(つぐなり)は内膳(うちのかしわで)職（天皇の食膳奉仕の職）において、安曇氏が優先されていないことに不満を募らせた。そして桓武天皇のとき（791 年）に膳職の職務を放棄するという罪を犯し、佐渡島へ流刑となった。さらに安曇宿禰大丘は桓武天皇のとき（799 年)、世襲としてきた内膳職の奉膳(ぶうぜん)（長官職）から外されてしまった。これ以降では従五位下安曇宿禰広吉を安房守任じるという記録があるだけで、それ以外は見つからない。朝廷においてはすっかり没落してしまったようである。

2　大和朝廷における他の安曇氏族

海犬養氏は天武天皇の時に宿禰という姓(かばね)を授与されていたが、平安時代では無姓である。聖武天皇紀（740 年条）によると、海犬養五百依(いおき)は橘左大臣家の家令になっていたと記されている。すると、海犬養氏は奈良時代中頃には、世襲職としてきた宮城門・海犬養門の警備職から没落し、橘左大臣家に従属していたのである。なお徳島市八多町には式内社速雨(はやさめ)神社があり、由緒書の中で、この地は「古代豪族海(あまの)犬飼(いぬかい)氏」の領地だったと記されている。またこの近くに犬飼地籍が現在も残っていることから、海犬養氏はこの地に土着したと思われる。しかし現在ではその消息は消えてしまった。

凡海氏は連姓となっている。これも宿禰姓から降格されている。海犬養氏と同様に衰退していたと思われる。凡海連は丹後国加佐郡凡海郷（舞鶴市）に居住していたと考えられるが、その地で海部(あまべの)直(あたい)氏との争いが生じ、それに敗れて衰退したと思われる。室町時代に建福寺が、凡海郷の寺所から納められる年貢が少ないとして凡海郷代官を訴えたという文書がある。それ以降では凡海郷地名および凡海連の消息は絶えてしまった。

八木造は平安京に居住と記されているが、本拠地は河内国和泉郡八木郷と言われている。現在の岸和田市の中井町周辺である。八木造は八木郷にしっかりと根を下ろし、住民たちを統率していたと思われる。そして他の氏族との婚姻関係をいくつもつくり繁栄していた。八木郷は全国に多数分布しており、また八木姓の人々が現在も多数存在していることは、このことを示している。八木造は大きな勢力を保ちながら現在まで継続している。

安曇犬養連は平安時代はじめには摂津国で朝廷の倉の警備にあたっていたと思われる。一方、『古代氏族系譜集成』によると、大浜宿禰の 5 世孫は信濃国穂高神社を奉斎した（6 世紀ころと思われる）とのことである。すると安曇犬養連は平安時代のはじめころには、朝

廷貴族としては没落し、信濃国安曇郡へ移住していたと思われる。

3　ゆかりの地における安曇氏族のその後

ゆかりの地のおける安曇氏族は弥生時代から飛鳥時代のころには、安曇郷を設立し首長として定着していた。大化改新での私有地放棄と私有民（部曲(かきべ)・部民(べみん)）解放の制度は当初は畿内ではじまったが、その後全国にも広がり、やがてゆかりの地でも大きな変革をもたらした。

安曇部(あづみべ)（安曇氏族の部民）は解放され自由民となり、口分田(くぶんでん)を支給されそして自立していった。中には墾田したり買収したりして所有する土地を増やし、地域の有力者となる者も誕生した。例えば信濃国安曇郡では安曇部百鳥についての記録が残っている。　この人物は安曇部であったが、奈良時代中頃（764 年）には従七位上という位階を授与され、主帳という郡の役人に昇進していた。また平安時代前期（866 年)、阿波国名方郡に安曇部粟麻呂がおり、彼は賀陽親王の家令であり、正六位上という官位を持っていたところ、安曇宿禰を下賜されたという記録がある。このころ安曇部は安曇氏族から離れ、自立したり、あらたな主家を探したりしていた。このような部民たちの自立は安曇部に限ったことではなく、全国的にみられる傾向であった。

奈良時代では郡・郷の古代氏族による支配形態が解体し、中央集権的に再編されていった時代である。都は表面的には華やかだったが民衆の生活は悲惨だったようである。使役として都へ出たまま、故郷へ戻る費用がなくて浮浪民となる者が多く、また郷里でも租税負担に耐えられずに逃げ出す農民が多くいたようである。

一方豪族氏族にとっては、私有地と私有民がなくなったのであるが、郡司（郡・郷の役人）に任用され、従来と同様に地域の実質的支配者として活躍していた。そのためとくに不満はなかったと思われる。

その後、9 世紀ころから、朝廷では税収不足が大きな問題となった。そこで徴税強化のために国司の権限を強化する方向に制度改革が行われていった。これに伴い国司の権限が増し、郡司選定における国司の役割も強まった。一方、郡司の権限はどんどん奪われていった。国司側では急速に勢力を拡大し、郡司側では急速に衰退していった。そして郡司層（地域の豪族層）は国の制度変革に適応し発展するものと、適応できずに没落していくものとに分かれていった。適応できたものは、その後新興の在地領主，地方武士へと発展していった。安曇氏族も同様に、没落するものと勢力拡大し繁栄するものとに分かれていった。

１）筑前国糟屋郡安曇郷地域

筑前国糟屋郡安曇郷は安曇氏族発祥の地とされ、現在の福岡市東区・新宮町周辺と考えられている。この地域ではさまざまな歴史が展開された。弥生時代には中国の前漢および後漢との交流があり、また人口増大に伴い住民たちは大挙して日本列島の東方へ進出していった。その後磐井の乱（527～528 年）が起こり、糟屋郡地域は糟屋屯倉としてヤマト大王へ

賠償として献上された。この事件で、安曇氏族の主だったものは安曇郷を追われ周辺地域、志賀島・大川市地域へ追放されたと思われる。

その後那津官家(なのつのみやけ)が設立され、海犬養連が設立された。そして白村江の戦い（663 年）が起こり、百済と日本の連合軍は大敗した。その結果那津宮家は大宰府へ撤収し、海犬養連は大和国へ移住していった。

こうした歴史の中でこの地域の安曇氏族は衰退の一途をたどることになったと思われる。氏神神社である志賀海神社が安曇郷ではなくて志珂郷の志賀島にあることは、安曇氏族の衰退状況を反映しているように思える。平安時代以降では安曇郷という地名も消えてしまい、安曇姓を名乗る人も少ない。

２）播磨国・摂津国地域

安曇連は応神天皇・仁徳天皇の時には播磨国明石郡垂水郷、摂津国難波地域において繁栄し、そして雌伏したのであるが、その後飛鳥時代に入って復活した。そして播磨国揖保郡石海(いわみ)郷・浦上(うらかみ)郷地域で水田を開拓し、定着していた。しかしその後播磨国における安曇連の消息は少なく、『朝野群載(ちょうやぐんさい)』（平安時代後期の書）という書にわずかに記載されているだけである。それによると平安時代後期（1015 年）に赤穂郡有年荘(うねのしょう)に安曇を名乗る寄人(よりうど)が 7 人いたと記されている。寄人とは何かはっきりしないが、石海郷・浦上郷等から逃げ出し有年荘へ移りそこで雑役などをしていた人のようである。この人々は石海郷・浦上郷で百姓として定住できず、没落し、この地から逃散したと思われる。

３）美濃国厚見郡厚見郷（岐阜市周辺）、三河国渥美郡渥美郷（豊橋市・田原市周辺）

濃尾平野へ進出した安曇氏族は、尾張氏族等に圧迫され美濃と三河地域に移動して定着したと考えられる。そして厚見(あつみ)氏および渥美(あつみ)氏を名乗り、郡・郷を設立し、地域に密着し開拓に励んだと思われる。中央から遠く離れ、土豪として発展し繁栄してきた。現在においても厚見姓、渥美姓を名乗る人々は多数おり活躍している。

４）信濃国安曇郡前科郷・八原郷・高家郷（安曇野市周辺地域）

安曇郡には古墳時代後期の群集墳がある。小規模な円墳群であり、数は百基以上あると言われている。それらの大きさはみな同程度である。このことは、当時の安曇郡地域では突出した勢力をもつ首長・豪族はおらず、住民たちは平準化されていたことを示している。当時の安曇郡の農業生産力は低く、そのため安曇氏族といえども富の蓄積は容易でなかったと思われる。それでも奈良時代中頃には、部民から解放された自由民たちはそれぞれに開拓努力を続け、富を蓄積し有力者となる者が出てきた。その例が安曇部百鳥である。

安曇氏族は開拓や農作業から離れ、穂高神社の宮司として地域の精神的支柱として尊崇される立場になっていったのではないだろうか。その後中世では相次ぐ戦乱に見舞われ、安曇氏族は分散してしまったと思われる。安曇部は土着民として地域に根付いていたと思われるが、いまではその消息も絶えてしまった。現在では安曇姓を名乗る人も見当たらない。

５）その他のゆかりの地

ゆかりの地としてこの他に伯耆国会見郡安曇郷（米子市上安曇・下安曇地域)、隠岐国海部郡、丹後国加佐郡凡海郷（舞鶴市地域)、近江国伊香郡安曇郷・高島郡（長浜市高月町・高島市安曇川町地域)、相模国足下(あしのしも)郡土肥(どひ)郷（湯河原町・真鶴町地域）がある。これらの地域における安曇氏族の経歴は、それぞれに多少の差異はあるが似たようなものである。いまでは安曇氏族は消えてしまった。

（２０２０年１０月　会報安曇人１７号掲載）